

中国人上級日本語学習者の縮約形の使用状況

東 会娟

キーワード 縮約形、使用率、JSL、JFL、中国人上級日本語学習者

はじめに

日本人は日常会話で、「遅れてしまいました」の代わりに「遅れちゃいました」、「置いておいてください」ではなく「置いといてください」のように、よく縮約形を使う。しかし、こういった縮約表現は、海外で日本語を学習した学習者にとって困難に感じることの1つだと言われている。特に中国人日本語学習者の場合、母語の中国語は日本語と語族¹が違い、縮約形のような表現は存在しないため、縮約形の習得が難しいと考えられる。大学で4年間日本語を勉強したにもかかわらず、渡日した際、縮約形を含んだ自然な日本語の話し言葉に慣れていないことで挫折を覚えることが多い。筆者自身も学習者としてそういった体験をしたことがある。そこでほかの学習者はどうなのかについて興味を持ったことがこの研究を始めた契機でもあった。しかし、先行研究を調べたところ、日本語母語話者の縮約形の使用率²を調査したものはあるものの、学習者の縮約形の使用に目を向けたものはほとんどないことがわかった。特に中国人学習者の縮約形の使用状況について調べた研究は1例を除き見当たらなかった。

縮約形は何気ない日常生活の何らかの場面でふと現れたりするが、ある一つの縮約形表現を調べることは非常に困難である。縮約形を使うか否かは話し相手や場面、会話内容、会話環境など実に様々な要因に影響されるからである。自由会話の録音やロールプレイを行っても、データからは見たい表現が出てこないことが多い。また、日本語母語話者に関しては、テレビ番組や長時間の雑談などから大量なデータ収集が可能であるが、学習者の場合は使用できるデータがかなり限られている。学習者の縮約形使用に関するこれまでの研究において比較的多く出現する2、3種類の縮約形表現しか取り上げられていないのもそのためではないだろうか。

日本語教育現場では、縮約形を指導すべきかどうかに対しては賛否両論があ

るが、近年では初級レベルから縮約形を多く扱っている教科書が現れてきた。しかし、その教育の成果や、学習者の縮約形の使用実態に関しては依然として把握されていない。そこで、本研究では中国人日本語学習者を対象に、口頭で縮約形を使用できるかどうかについて調べることにした。また、縮約形の使用は日本語レベルに関係している³と考えられるため、本研究では上級レベルの学習者に限定する。

1. 先行研究

縮約形の研究は数少ないが、30年ほど前からその重要性が指摘されている。土岐 (1975) はラジオとテレビ番組の会話をデータにし、縮約形について調べた。そして、縮約形は必ずしも会話スピードの速いときに現れるものではない、縮約形はインフォーマルな場面だけでなく、フォーマルな場面にも使用されている、の2点を示した。

堀口 (1989) もテレビとラジオ番組の発話データから日本人の縮約形の使用率を調べ、その結果を日本語学習者の縮約形の指導に活かそうとした。その結果日本人は平均して52%の割合で縮約形を使用していることが明らかになり、以下の3点が示された。

- 1) 縮約形「んだ」、「じゃ」、「てる」、「きゃ」の使用率はそれぞれ98%、82%、74%、72%であり、かなり高い頻度で使用されている。このような使用率の高い表現項目は日本語教育でも積極的に取り入れるべきである。
- 2) 「きゃ」に関しては、使用例の中で「なきゃ」がほとんどであるため、日本語教育では、「～なきゃいけない／ならない」の文型だけ原形（「～なければいけない／ならない」）とともに導入したほうがいい。
- 3) 「ちゃう」と「とく」の実際の使用例は少ない（84例、13例）ため、日本語教育では特に取り上げる必要がない。

上記2点の研究では、日本語母語話者が頻繁に縮約形を使用していることを検証したもので、日本語学習者の縮約形の使用状況については触れられていない。日本語学習者の縮約形の使用状況に視点を向けた研究は嶺岸 (1999)、福島・上原 (2004)、東 (2006) が挙げられる。

嶺岸 (1999) は学習者の録音した刺激文に対し日本人の評価を求め、「縮約形の指導のめやす」を提案した。それによると、縮約形「んだ」「てる」「じゃ」「ちゃう」は初級の段階から使用し、「とく」などは上級段階でインフォーマルに話す場合にのみ使用したほうが日本語母語話者による評価が高いことが分

かった。しかし、この研究で用いられたデータは刺激文を学習者に読ませたものであり、学習者の実際の使用状況だとは考えにくい。なお、嶺岸（1999）では日本語母語話者の使用状況についても調べた。その結果、フォーマルかインフォーマルな場面かに関わらず、「んだ」「てる」「じゃ」の3項目に関して母語話者の使用頻度が高いことが分かった。この結果は堀口（1989）とほぼ一致している。

福島・上原（2004）は丁寧体を基調とした会話場面における日本語学習者と日本語母語話者の会話を比較し、学習者は「個人により使える表現形式に偏りがある」、「母語話者では縮約形のほうが基本形となっているもの（『こ・そ・あんな』）でも、縮約形ではない表現形式（『こ・そ・あのような』）を用いる場合がある」などの特徴がある、という結果を得ている。そのほか、学習者の学習期間と日本滞在期間が縮約形の使用に影響していることがこの研究で示唆された。しかし、この研究で分析対象とした縮約形は2項目（けど、こ／そ／あんな）しかないため、得られた結果は一般化することが難しく、学習者の使用状況そのものであるとはいえない。

東（2006）は日本語学習者のインタビュー会話からなるKYコーパス⁴を用いて調査を行った。初級・中級・上級・超級の中国人学習者を対象に調べた結果、中級以下の日本語学習者は縮約形の使用例が非常に少ないことが明らかになった。この結果は本研究の調査対象を上級学習者に絞った根拠付けにもなっている。しかし、OPIテストでは学習者の話し相手が教師であり、テスト状況という会話環境であることや、各レベルの学習者数が少ないことなどの制約があるため、この結果に関しては今後さらに検証する必要がある。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では日本語学習者の縮約形の使用状況を明らかにするために、口頭調査を行い、以下の3点を検討する。第一に、日本語母語話者（JNS：Japanese Native Speaker）と比べ、上級日本語学習者の縮約形の使用状況はどうであるか。第二に、日本国内で学習した学習者（JSL：Japanese as a Second Language）と中国で学習した学習者（JFL：Japanese as a Foreign Language）の縮約形の使用状況に違いが見られるか。第三に、縮約形の使用は上下、親疎関係などの社会的要因により学習者の縮約形の使用の傾向に違いがあるかについても検討したい。

2. 縮約形の定義と本研究で扱う縮約形

本研究における縮約形の定義については斉藤（1991）に従い、「同一と認めら

れる複数の音形を持つ語（句）に『音節数の減少』あるいは『音数の減少』または『音量の減少』のいずれかの音声的過程が認められた場合、その認められた形を縮約形とする。そのもとの形を「原形」と呼ぶ。

表1 本研究で扱う縮約形

のだ ⁵ ーんだ	ているーてる	ではーじゃ
ければーきゃ	てしまうーちゃう	ておくーとく

また、堀口(1989)に基づき、本研究で扱う縮約形項目を「んだ」⁶「てる」⁷「じゃ」「きゃ」「ちゃう」⁷「とく」(表1)の6つとする。そのうち、「んだ」「てる」「じゃ」は堀口(1989)で出現頻度が高いとされており、「きゃ」「ちゃう」「とく」は同研究で使用率が低いとされているものの、日本語の教科書で縮約形として一般的に取り上げられていることから、本研究で扱うこととする。

3. 研究概要

本研究は口頭による談話完成テスト(DCT: Discourse Completion Test)⁸を用いてデータを収集した。⁹従来の研究におけるDCTは書き込みによる収集法が多いが、本研究では学習者が実際に口頭で縮約形を使えるかどうかを調べるために、口頭による談話完成テストを行った。調査は個別面接により行なわれた。調査の際、被験者に下記場面1のような会話内容を紙で提示した。相手役(例: 場面1 先生役)のセリフは、事前に日本人に録音してもらい、口頭調査の際テープレコーダーから流した。被験者にはAの役を担当させ、括弧内に提示されていることばを用いて口頭で会話を完成するよう指示した。調査時間は一人当たり約10分間である。

場面1: あなたは腹痛で病院に來ています(你因为肚子痛來到醫院)¹⁰。

- A: こんにちは。
 先生: こんにちは。どうしたんですか。
 A: お腹が_____ (痛い)。
 先生: あ、そうですか。……

対人関係の影響を考察するために、各縮約形項目において、会話の相手とし

て①目上、②初対面／親しくない人（以下略して「初対面」と示す）、③友人の3種類を設定した。問題は全部で18問あり、表2に各問題（Q）で扱う縮約形項目と会話の相手をそれぞれ示した。

表2 各問題で扱う縮約形項目と会話の相手

	目上	初対面	親友
んだ	Q 1 (医者)	Q 7 (駅員)	Q 13 (親しい友人)
てる	Q 8 (指導教官)	Q 14 (映画館での知らない人)	Q 2 (親しい友人)
じゃ	Q 4 (指導教官)	Q 12 (あまり知らない同級生)	Q 17 (親しい友人)
きゃ	Q 10 (バイト先の先輩)	Q 18 (バス停での知らない人)	Q 5 (親しい友人)
ちゃう	Q 15 (指導教官)	Q 3 (駅員)	Q 9 (親しい友人)
とく	Q 16 (指導教官)	Q 6 (同級生の知り合い)	Q 11 (親しい友人)

調査時期は2004年6月～10月¹¹までで、被験者の詳細は下記表3に示されている通りである。なお、J S L、J F Lは日本語能力試験1級に合格しているか、それと同程度と担当の日本語教師によって判断されており、上級学習者とみなす。

表3 本研究の調査対象

	日本語学習歴 (平均)	滞日経験	年齢 (平均)	人数 (男:女)	身分
J N S ¹²	—	—	22.5歳	30人 (11:19)	大学生/大学院生
J S L	3年3ヶ月	1年以上	23.1歳	30人 (15:15)	大学生/大学院生
J F L	3年0ヶ月	無し	21.4歳	30人 (14:16)	大学生

調査終了後、文字化作業を行った。まず被験者の発話した各問題のブランク部分(上記場面1参照)について、その録音テープから筆者が書き起こした。その後1名の日本語母語話者により、チェックを行った。筆者とチェックを行った日本語母語話者の間で食い違ったところはさらにもう1名の日本語母語話者に依頼した。

4. 結果

4.1 項目別にみる JNS、JSL、JFL の縮約形の使用状況

日本語学習者の縮約形の使用状況を明らかにするために、同じ会話環境における日本語母語話者の使用状況を明確にする必要がある。本節ではまず比較の対象となる日本語母語話者の使用状況を示してから、学習者の使用状況を示し、両者を比較する。

4.1.1 JNS の縮約形の使用状況

図1には、日本語母語話者（JNS）の各縮約形別に見る縮約形（JNS縮約形）と、その原形（JNS原形）および原形と縮約形の双方とも使用されていない表現（JNSその他）の使用率（%）を示す。

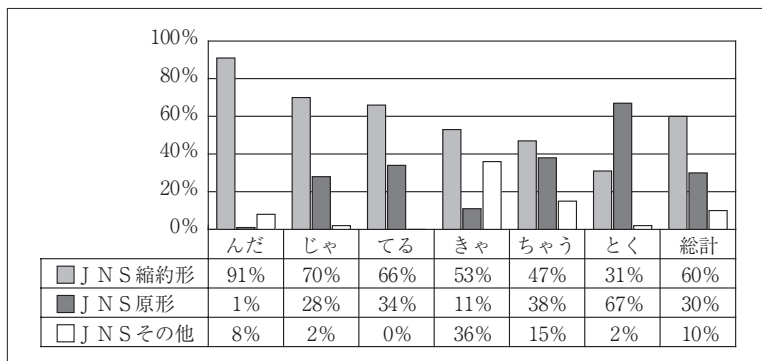


図1 項目別にみる JNS の縮約形と原形の使用率

図1から分かるように、日本語母語話者は、平均して60%の割合で縮約形を使用しており、縮約形の使用率が高いといえる。特に縮約形「んだ」「じゃ」「てる」の3項目は非常に高い割合で使用されていることが分かった。この結果は、堀口（1989）、嶺岸（1999）と一致している。

一方、縮約形「ちゃう」「とく」の使用率は50%に至らず、低い結果となった。この2つの項目に関しては堀口（1989）でも使用率が低く、日本語教育では扱わなくてよい項目と指摘されている。しかし、この2つの縮約形は場面や話題によっては頻繁に使用される場合もあれば、実際に多くの教科書に扱われていることも事実である。「扱わなくてもよい」と早急に結論付けるには検討が

必要であろう。

「JNSその他」(図1)の具体例について見てみよう。例えば、項目「ちゃう」の場合、回答が「ゴミ箱に入れちゃった(/入れてしまった)」と想定される場面において、被験者が「ゴミ箱に入れた」と答えた場合などである。また、項目「きゃ」の場合は、回答が「病院に行かなきゃ(/行かなければ)いけない」と想定される場面において、「病院に行かないといけない」や「病院に行かなくてはいけない」と答えた場合である。このように「JNSその他」には、縮約形・原形の部位が省略されたケース(「ちゃう」の場合)や、文の意味が維持されたまま他表現へと置き換えられているケース(「きゃ」の場合)が含まれる。

4. 1. 2 J S L、J F Lの縮約形の使用状況

以下図2には、J S Lの縮約形(J S L縮約形)とその原形(J S L原形)、および原形と縮約形のどちらも使用されていない表現(J S Lその他)の使用率(%)を示す。また、図3には、J F Lの縮約形(J F L縮約形)とその原形(J F L原形)、またそのどちらも使用されていない表現(J F Lその他)の使用率を示す。

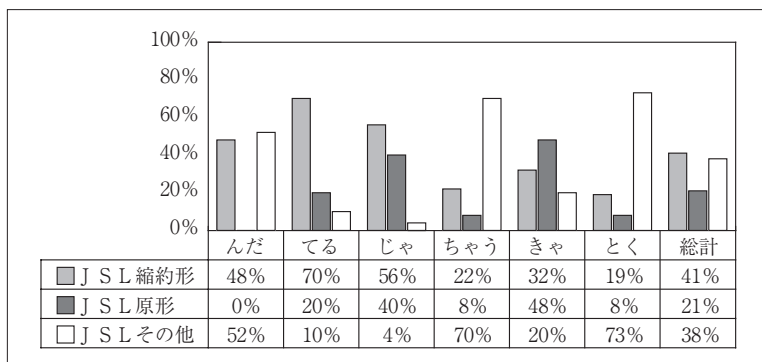


図2 項目別にみる J S L の縮約形と原形の使用率

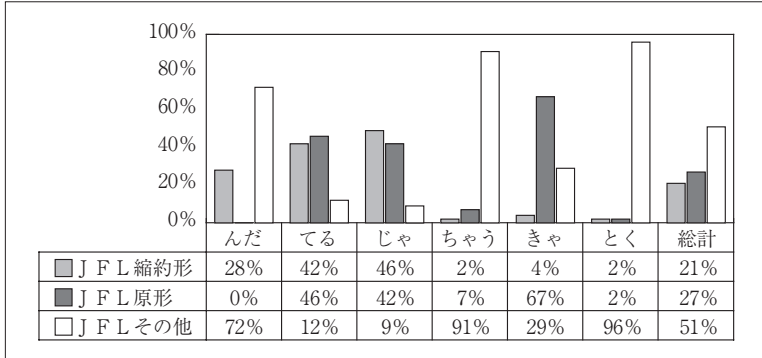


図3 項目別にみるJFLの縮約形と原形の使用率

図2・図3から分かるように、JSLの縮約形の平均使用率は41%であるのに対し、JFLは21%であった。項目別に見てみると、縮約形「てる」・「じゃ」の2項目に関しては、JSL・JFLともに比較的多く使用しているが、「んだ」については、JFLの使用率がかなり低かった。更に、項目「ちやう」・「きゃ」・「とく」はJFLに縮約形の使用がほとんど見られなかった。

JSL・JFLの大きな特徴として、「その他」の割合が高いことが挙げられる。学習者の「その他」(「JSLその他」・「JFLその他」)は、「JNSその他」と同じような縮約形・原形の部位が省略されたケース、文の意味が維持されたまま他表現へと置き換えられているケースもあれば、学習者特有の特徴である誤用も多く含まれている。例えば、項目「きゃ」の場合、回答が「行かなきゃ (／行かなければ) いけない」と想定される場面において、「行っていけない」や、「行けなければいけない」などのような回答が見られた。また、項目「とく」の場合、「メールボックスに入れときます (／入れておきます)」と回答すべきところで、「～入れときます」と回答したものなどがあつた。

4. 1. 3 JNSとJSL、JFLとの比較

ここで今回行った口頭調査における縮約形の使用頻度の結果を3グループで比較してみる。表4には各グループの縮約形の使用頻度の平均値とその標準偏差を示した。

表4 JNS、JSL、JFL使用頻度の平均値と標準偏差

グループ (n=30)	平均値	標準偏差
JNS	10.73	2.53
JSL	7.40	3.38
JFL	3.77	2.00

表4に示されている各グループの平均値の分散分析を行ったところ、有意な差が認められた ($F(2, 89) = 50.105, p < 0.001$)。これを、シェフイーの多重比較で検定した結果、JNSとJSLとの間、およびJSLとJFLとの間で、いずれも有意な差が見られた(表5)。

表5 JNS、JSL、JFL縮約形の使用率の差

(I) グループ	(J) グループ	平均値の差 (I-J)
JNS	JSL	3.33***
JNS	JFL	6.97***
JSL	JFL	3.63***

*** : $p < .01$

この結果から、JSL・JFLがJNSより、縮約形の使用頻度は有意に低いことがわかった。また、JSLとJFLとの間に使用頻度の差が明らかになり、縮約形の使用への学習環境の影響が示唆された。

4.2 場面別に見るJNS、JSL、JFLの縮約形の使用率

以下表6～8には各グループにおける使用率の高い(60%以上)場面(Q)とその場面で扱われている縮約形および話し相手を示した。

表6 場面別にみるJNSの縮約形の使用率

	Q7	Q13	Q2	Q12	Q17	Q9	Q1	Q5	Q14	Q11
縮約形	んだ	んだ	てる	じゃ	じゃ	ちゃう	んだ	きゃ	てる	とく
相手	初	友	友	初	友	友	上	友	初	友
使用率	100%	97%	93%	93%	93%	93%	77%	70%	63%	60%

表7 場面別にみる J S L の縮約形の使用率

	Q 2	Q14	Q17	Q12	Q 7	Q 1	Q 9
縮約形	てる	てる	じゃ	じゃ	んだ	んだ	ちゃう
相手	友	初	友	初	初	上	友
使用率	87%	87%	77%	70%	67%	60%	60%

表8 場面別にみる J F L の縮約形の使用率

	Q17	Q 2
縮約形	じゃ	てる
相手	友	友
使用率	80%	70%

表6～8からも、日本語母語話者と学習者との違いが明らかになった。

まず、縮約形の使用率が最も高い項目が異なる。J N S の場合、使用率の高い項目が「んだ」であるのに対し、J S L は「てる」、J F L は「じゃ」であることが判明した。特に相手が友人である「んだ」に関する会話場面（Q13）を見ると、母語話者が非常に高い割合で使用しているのに対し、J S L・J F L ともにほとんど使用していなかった。この結果は中国人上級日本語学習者にとって「んだ」の習得がまだ定着していないことを示唆した。

次に、使用率の高い縮約形項目のバラエティーが異なる。J N S の場合、使用率の高い（60%以上）項目の中に6つの縮約形すべてが含まれている。それに対し、J S L の場合は「てる」「じゃ」「んだ」「ちゃう」の4つ、J F L の場合は「てる」「じゃ」の2つしか含まれていない。

更に、話し相手による使用傾向も異なる。J N S の場合は、話し相手が友人である場合、6つの縮約形項目すべてにおいて60%以上の高い使用率を示した。特に「んだ」に関しては、相手が目上、初対面、友人に関わらず、J N S の縮約形の使用率が高い。また、項目「じゃ」の場合、J N S は友人より初対面の人に対して多く縮約形を使用している。つまり、J N S が縮約形を使用する際話し相手を意識することがあるが、縮約形項目によっては相手に関わらず縮約形の使用を好む傾向があるといえる。

それに対し、J S L、J F L の場合は、「てる」「じゃ」「んだ」のいずれの項目においても、目上より初対面、初対面より友人に対して縮約形を多く使用する傾向があるようである。これは初対面や目上に対してくださった表現を使用し

てはいけないという学習者の意識が働いた結果だと考えられる。しかし、その意識は日本語母語話者の使用実態と多少ギャップがあるように見受けられる。

5. 考察

今回の調査では、今までの先行研究と同様、日本語母語話者が高い使用率で縮約形を使用していることが明らかになった。特に友人同士の会話では「とく」を除いて70%以上の割合で縮約形が使用されている。つまり、意識しているかどうかはともかく、実際に日本人は日常生活の中で頻繁に縮約形を使用している。したがって、学習者が生の日本語に接する際に、必ず縮約形に触れることになるといえる。特にJ S Lの場合はJ F Lに比べその可能性がより高いと考えられる。

しかし、学習者自身は上級になっても縮約形をあまり使用していない。その使用率が母語話者よりかなり低いことが分かった。特にJ F Lの場合、一部の項目（「んだ」）に関して使用率がかなり低いか、或いはほとんど使用していない（「きゃ」「ちゅう」「とく」）。J S LはJ F Lより多く使用しているが、日本語母語話者に比べるとまだ差がある。また、話し相手による使用傾向においても、学習者と母語話者との間にギャップが見られた。母語話者は相手が誰でも縮約形を使っているのに対し、学習者は目上や初対面の人に対してだけけた表現を使用してはいけないという意識から、縮約形の使用を控える傾向があるようである。

18個の会話のみで学習者が縮約形を習得しているかどうかについて検討することは難しい。しかし、少なくとも同じ会話環境で日本語母語話者が多く使っているのに対し、学習者が使っていないということは、これらの縮約形は上級学習者にとってもまだ十分に運用できていないといえる。

運用に結びつけるためには、縮約形に関する明示的指導が必要だと考えられる。House (1996)でも、明示的な指導を受けた学習者と受けていない学習者とは、最終的に習得の度合いが明らかに異なってくることが示唆されている。

指導するにあたって考えなければならないのは、置かれた言語環境の違いによる縮約形使用の必要性である。J F Lの場合、日本語は学校と仕事場面での使用に限られる。しかし、J S Lは学校場面、仕事場面に限らず、すべての生活場面において日本語の使用を余儀なくされている。そのため、J F Lにとっては縮約形は実際に使えなくても「わかる」程度でもいいであろう。しかし、

JSLの場合、縮約形は「わかる」だけではなく、「使える」ことが望ましいと考えられる。JSLはインフォーマルな会話場面に出くわす機会が多いからである。同年代の友人と話す時にも原形しか使わず、終始文章表現に近い日本語で話していると、態度は馴れ馴れしいのに表現が硬いという不自然な印象を与えたりするなど、不本意に周囲の日本人と距離を置くことになりかねない。JSLがより自然な、その場の雰囲気や溶け込むような日本語を話せるようにするために、縮約形を含め、くだけた日本語表現の指導が必要である。勿論、作文やあらたまった会話場面における過剰使用を防ぐために、縮約形の指導は学習者のレベルに合わせ、段階的になされなければならない。

6. 終わりに

本研究はこれまで明かされてこなかった日本語学習者の縮約形の使用に注目した。同じ会話場面における日本語母語話者の使用状況と比較することによって、上級学習者の縮約形の使用状況を明らかにした。その結果に基づき、日本語教育においては学習環境の違いを考慮した上で、縮約形に関する明示的な指導を提案した。

縮約形の指導に関して、土岐（1975）は早い時期から学習者に縮約形を聞かせる必要があると主張し、嶺岸（1999）は会話中心に教えるものと聴解中心に教えるものを区別し、縮約形指導の目安を設定した。このように、縮約形を日本語教育の目標にしなければならないことは以前から指摘されている。しかし、これらの提案は実際に検証されておらず、果たしてどこまで学習者の縮約形の習得に繋がるかは不明である。また、縮約形を習得したことで、学習者の日本語会話能力の評価にどのように影響を及ぼすのかも明らかになっていない。今後はこれらの課題について検討していきたい。

注

1. 日本語は膠着語に、中国語は孤立語に属す。
2. 縮約形の使用率＝縮約形出現数／（縮約形出現数＋原形出現数）
3. これは東（2006）によって検証されている。
4. KYコーパスとは、90人分のOPIテープを文字化した言語資料である（日本語OPI研究会ホームページ：<http://www.opi.jp/index.html>参照）。本

研究ではそのなかの中国語母語話者29人（超級5人・上級10人・中級9人・初級5人）分のデータを分析した。

5. 左側は各縮約形項目の原形にあたる。
6. 「撥音化」（「の」→「ん」）による縮約形の種類は数多く存在するが、小磯他（2002）によると、準体助詞「の」はその後続形態素が「だ」（「です」「じゃ」「だ」を含む）である場合（「のだ」）、撥音化率が最も高いことから、本研究ではその「んだ」（「のだ」）だけを対象とする。
7. 梁江（2003）では項目「～ちゃう」は「～てしまう」の縮約形である以外に、独自の意味も持っている」と述べられているが、そういった独自の意味に関する検討は今後の機会に譲る。
8. Oral discourse completion task（O D C T）とも言われている（Brown, J. D. 2001）。
9. 研究方法について最初の段階ではロールプレイや自由会話などを試みた。しかし、縮約形項目の出現数が会話の内容に大きく左右されるため、最終的にこの方法にたどりついた。調査シートは、日本語母語話者数人の協力を得て、できるだけ自然な会話内容に設定した。その後母語話者と学習者の計9人を対象とした予備調査を経て本調査の内容を決めた。
10. 口頭調査では、学習者に素早く場面提示を理解してもらうために、中国語の訳をつけた。
11. 母語話者の出身地を統一させるため、一部のデータは2007年8月に取り直した。
12. J N S は全員愛知県出身である。

参考文献

- 小磯花絵他 2002 話し言葉における助詞の撥音化現象の実態—『日本語話し言葉コーパス』を用いて— 第10回社会言語科学会研究大会予稿集, 215-220
- 齊藤純男 1991 現代日本語における縮約形の定義と分類 東北大学日本語教育研究論集, 6, 89-97
- 迫田久美子 2002 日本語教育に生かす第二言語習得研究 アルク
- 土岐 哲 1975 教養番組に現れた縮約形 日本語教育, 28, 55-66
- 東 会娟 2006 会話コーパスに見る中国人日本語学習者の縮約形の使用状況 言葉と文化, 7, 51-66

- 東 会娟 2006 中国人上級日本語学習者の縮約形の使用状況 日本語教育方法研究会誌, 14 (2), 50-51
- 福島悦子・上原聡 2004 丁寧体の会話における縮約形使用に関する一考察—日本語の母語話者と学習者の会話を比較して— 東北大学大学院国際文化研究科論集, 12, 121-130
- 堀口純子 1989 話し言葉における縮約形と日本語教育への応用 文芸言語研究言語篇, 15, 99-121
- 牧野成一他 2001 ACTFL OPI入門 アルク
- 嶺岸玲子 1999 日本語学習者への縮約形指導のめやす 日本語教育, 102, 30-39
- 梁井久江 2003 『ーテシマウ』と『ーチャウ』の相違 日本語教育学会平成15年度春季大会予稿集, 67-72
- Brown, J.D 2001 Pragmatics tests: Different purposes, different tests, Kenneth R. Rose and Gabriele Kasper(eds.): Pragmatics in Language Teaching. Cambridge university press: 301-325
- House, J. 1996 Developing pragmatic fluency in English as a foreign language: Routines and metapragmatic awareness. Studies in Second Language Acquisition 18, 225-252